

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【指扇北小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	国語では、今年度課題として「主語・述語の関係」や「修飾語」「敬語」に関する部分は、昨年度と比較し向上しているが、継続して指導していく必要がある。漢字の定着に課題があることが分かったので、来年度は漢字を文内で使用する機会を増やしたり、実際に書く時間と学習者端末での学習とのバランスを考える必要がある。 算数では、基本的な計算技能の向上がみられている部分もあるが、まだ改善が必要な部分もあるので、今後も継続して指導していく。社会や理科では、基本的な用語や技能の理解をさらに定着していく必要がある。
思考・判断・表現	国語では、「話すこと・聞くこと」に大きな課題が今年度みられたので、メモしたものを実際にスピーチするまでの間の指導を丁寧に、ポイントをおさえるなど、指導事項を明確にして指導していきたい。 算数や社会、理科では、解決方法や資料から読み取ったこと、実験結果などを基にして、自分の考えを説明することに引き続き課題がある。個別最適な学習を進める中で、個別に型を用意したり、児童どうして説明する機会を積極的に設けたい。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「主語・述語の関係」「敬語」「修飾語」 算数「数と計算」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導を充実させていく必要がある。反復や復習の時間の確保が十分ではない。	⇒ 単元ごとに書き込み式のドリルやドリルパーク等を活用し、基礎的・基本的な内容の反復・習熟に取り組む。【毎単元内で実施】 授業で何を学習したのか、何が身に付いたのかを振り返る機会を設定する。【毎時間】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「読むこと」「話すこと・聞くこと」 算数「数と計算」変化と関係「データの活用」 <指導上の課題> 児童主体の学習活動の機会を充実させていく必要がある。また、自分の考えを表現する機会が十分ではない。	⇒ 学びのポイント「じ・しゃ・く」を意識した児童主体の授業を行うために、ルーブリック(評価規準)を授業の始めに示し、終わりに振り返る。【毎時間】 学習者端末を効果的に活用し、授業で自分の考え(計算の仕方の説明や選択した理由など)を表現する機会を設定する。【週に3回以上】

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	単元ごとに書き込み式のドリルやドリルパーク等を活用し、基礎的・基本的な内容の反復・習熟に全単元で取り組んだ割合は、49%であった。全単元ではないが、多くの単元で取り組んだ割合は、91%であった。 授業で何を学習したのか、何が身に付いたのかを振り返る機会を「毎時間」で実施した割合が1学期終了時点の5%から3学期時点で23%と大幅に上昇した。「ほとんどの時間」で実施した割合は、57%から72%に上昇した。
思考・判断・表現	B	ルーブリック(評価規準)を「毎時間」「ほとんどの時間」で授業の始めに示した割合が、1学期終了時点では46%から、3学期時点で51%に上昇した。また、ルーブリックを「毎時間」「ほとんどの時間」で授業の終わりに振り返る時間を設けた割合が、1学期終了時点では36%であったが、3学期時点で53%に上昇した。 学習者端末を効果的に活用し、授業で自分の考え(計算の仕方の説明や選択した理由など)を表現する機会を週3回以上設定した割合が、1学期終了時点では26%から3学期時点で28%に上昇した。学習者端末を使っていないが、振り返りを行う機会を設定している割合が減っているため、端末利用に移行していると考えられる。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、同音異義語の漢字の定着に課題がみられる。また、「解答時間が足りない」という児童回答の割合が高く、無回答率が後半になると高くなる傾向がある。複数の資料から必要な情報を選ぶことや時間配分の調整などの経験が不足していると考えられる。昨年度と同調査でも同様の傾向のため、学校の課題であるといえる。 算数では、図形の意味や性質、分数が単位分数(分子が1の分数)のいくつ分かという部分に課題がみられる。図形領域は、昨年度も課題となっていたため、学校の課題であるといえる。 理科では、電気を通す物や磁石に引き付けられる物といった金属の性質の理解や、顕微鏡の使い方の理解に課題がみられる。
思考・判断・表現	教科を問わず、記述式の問題に課題がみられる。 国語では、記述する際、特に条件に合わせて書くことが課題である。また、無回答率も多いことから、書くことへの抵抗感が小さくなるような、書く力の土台作りが必要であるといえる。 算数では、グラフ等から判断した理由や問いに対する求め方を式や言葉、数値を用いて説明することに課題がみられる。 理科では、結果を基に結論を導いた理由などを表現することに課題がみられる。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語においては、全般的に市平均に近い正答率を維持しているが、特定の漢字の読み書きや語彙に関する課題が見られる。特に、前学年までの配当漢字を文脈の中で正しく使う設問において、一部の学年で市平均を下回る傾向があり、定着度に個人差が見られる。 算数では、「数と計算」領域において、基本的な計算技能は概ね身に付いているものの、小数や分数の混じった計算、および「単位量あたりの大きさ」などの概念理解を伴う計算において正答率が伸び悩んだ。 理科・社会については、基礎的な用語の知識は定着しているが、実験器具の正しい名称や地図記号の判別など、細部の正確な理解に課題が残る。
思考・判断・表現	国語においては、「話すこと・聞くこと」の正答率が全領域の中で低く、課題となっている。 算数では、問題文から必要な情報を選択し、数量の関係を式に表したり、図やグラフを用いて説明したりする設問の正答率が、低い傾向にある。特に、複数の条件を整理して解決策を導き出す場面で、無解答や誤答が目立つ。 社会・理科においても、資料(グラフ・表・実験結果)を基に根拠をもって自分の考えを表現する問題に共通の課題があり、情報を多角的に捉えて考察する力の育成が必要である。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	
知識・技能	B	毎単元ごとに書き込み式のドリルやドリルパーク等を活用し、基礎的・基本的な内容の反復・習熟に取り組めたのは、約半数である。一部の単元で取り組めたを含めると約8割である。 「毎時間」「ほとんどの時間」で、授業で何を学習したのか、何が身に付いたのかを振り返る機会を設定できたのは、約6割である。	変更なし
思考・判断・表現	B	ルーブリック(評価規準)を授業の始めに示し、終わりに振り返る場面を設定しているのは、約4割である。 週3回以上、学習者端末を活用し、授業で自分の考えを表現する機会を設定していたのは、約25%で、学習者端末を使用せず、授業で自分の考えを表現する機会を設定していたのは、約60%である。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)